



とある橋の下で

あたしだけ子供の頃の写真が少ないって母に文句を言うと必ず横っちょから兄たちがお前は橋の下で拾われたからだよー。へっへー。などと言ってからかってくる。そんなことないよね？母は笑う。そういえば、あなたが生まれた時は病院の窓からきれいな虹の橋が見えたわねえ。

星の子

夜空を見上げているとしゅんしゅんと光をこぼしながら落ちてくるものがあった。てのひらで受ける。星の子だった。元気がないのでハチミツを与えてみた。こくりと飲んだ。星の子はうれしそうに5回点滅してみせた。窓を開けてやると星の子はふわりと浮き上がり、夜空に帰っていった。

冷蔵庫

冷蔵庫が急に冷えなくなったと妻に言われ調べてみたのだがどうにも私の手には負えない。近所の電器屋に見てもらったところ愛想のいい顔で買い換えた方がよいと言われる。引退を勧告されしょんぼりと台所の隅で佇む冷蔵庫。十年連れ添った炊飯器の湯気にも心なしか今日は元気がない。

ギャル系だし男慣れしてるかなと思ったのだが、いざ寝てみるとマグロだった。曰く。声をだすのが恥ずかしい。らしい。それでも男としては意思表示ぐらいしてほしい。気持ちいいときは右手。痛いときは左手を上げる。二人でそう決めた。顔を赤らめ手を上げる彼女の仕草は愛しかった。

合図2

別れ話を切り出した時。彼女は、分かった。今までありがとう。泣くでもなく、あっさりと言った。帰り際改札で彼女が見送ってくれた。最高の笑顔で。こいつ悲しくないのかよ。俺はそう思った。彼女は俺の姿がエスカレーターから消えるまでずっと、高々と上げた左手を振っていた。

8ミリ

踏切で電車が行きすぎるのを待っていると背中の子がおかあさん8ミリみたいやねえと言う。なにがと訊き返すと、あれと指差す。この子にはかたかたと通りすぎてゆく列車の窓が8ミリフィルムに見えたようだった。ほんまやねえとわたしは言う。ほんまやねえと子はふざけて真似をする。

家デート

いつも家デートじゃやだしあたしコアラがみたいなーと彼女が言うので動物園にやってきた。ねえコアラどこ？ あの枝で丸くなってるやつ。うそ。ほんと。寝てる。寝てるね。やる気ないね。やる気ないな。おうち帰って寝る？ 寝る。1時間後俺たちは部屋でミルクティを啜りながらナウシカを観ていた。

地元の友達

俺を友達に紹介しろよ。そしたら一緒に遊べるだろ。週末は地元の友達と遊ぶからと言ってデートを断る彼女にとうとう言ってやった。「分かった」俺が連れて行かれたのは児童養護施設だった。「毎週ボランティアで来てたの。ごめんね」「そうなんー」「みんなー今日は大きなお友達を紹介するよー！」

テロ組織に拘束されていた。拷問の上殺されるぐらいなら自分で死んだ方がましだ。俺は奥歯に青酸カリのカプセルを仕込んでいた。ひと月後。俺は無事解放される。祖国の地に降り立つと父親が待ち構えていた。「この馬鹿もんが」拳骨が頭に降ってくる。カチン。奥歯が嫌な音を立てた。

狼男

さっきからまったく会話に集中できなかった。なぜなら今夜は満月。もし彼女の前で狼男に変身してしまったらどうなる？ 嫌われるに決まってる。とにかく月さえ見なければ——「笥くん？」「はい？」「笥くん、危ない」水たまり。映る満月。スパークする。「晶、俺、お前を抱きたい」

初めて同士

お酒を飲んでいい感じになった僕たちは夜風に運ばれるようにしてラブホの中へ。僕も彼女も初めて同士。もちろんラブホも初めてだ。つまりシステムが分からない。「あたしこの部屋がいいな」彼女はパネルのボタンを押しエレベータの方に僕を引っばってゆく。なぜ？ なぜ知っている？

前カノ

バイクの事故で首を痛めて入院した時、熱心に見舞いに来てくれたのは前の彼女だけだった。結局俺達はよりを戻すことになった。退院後、数年ぶりに彼女の部屋を訪れた。お、懐かしいな。俺はアルバムに手を伸ばした。「あ、だめ」二人で撮った写真、全て、俺の首が切り取られていた。

時間屋

給料が入ったので時間屋にやってきた。受付カウンターの女性に利用者カードを提示する。ではこちらに希望の時間帯をご記入ください。わたしは1994.9.13.18:00～22:00と書き込む。4時間のご利用ですね。4800円頂戴致します。それではB-11号室へどうぞ。

「あなたそれはなんですか」「これはねミル・マスカラスモデルだよ。アメ横で買って来たんだ。もっと安いマスクもあったんだがやはり粗悪なものはすぐに飽きると店員に言われてね」「ちがいますよ。なぜそんなものを被っているのですか」「僕はね覆面作家を目指すことに決めたんだ」

バンドマンの憂鬱

このバンドは俺で持ってんだろうが！ ちょっと、ヤメなよてっちゃん。うるせえ園美お前は関係ねえっ！ テーブルをひっくり返す俺の非力な手。ドアをラバーソールで豪快に蹴飛ばし店を飛び出したもののすぐに足をもつれさせがらと階段を転がり落ちる。口の中に鉄の味が広がる。

大男

信号の側に雲を衝くような大男が立っていた。いや実際、頭は雲を衝き抜けていた。突然声が降ってきた。「Where's McDonald's?」「この道をまっすぐですよ」「What?」「Go straight」「Thanks」大男は立ち去った。背中にはBIGMACと書かれていた。

飛行機

高層ビルの間を縫って一機の飛行機が飛んでいた。だが街行く人々は誰も気が付いていないようだ。都会の喧騒の中でただ一人、ショーンだけが飛行機の行方を目で追っていた。手紙は亡き父の元に無事届くだろうか。ショーンの想いを載せた紙飛行機は、やがて青空に吸い込まれていった。

俺の物

ちっ、舌打ちする癖いい加減にして？ 生意気言ってんじゃねえ、俺は女の髪を掴み床の上を引き摺り回す。やめて、やめて、すこん、と手応えが抜け、手には髪の手束。頭皮がへばりついている。おーすまんすまん、俺は床で呻いている女の髪を再び掴み、こっち向けおい、言え、誰が悪い？

最後のデート

最後に連れてって。あそこに。そう言われ俺は水族館を訪れる。彼女が見上げる大水槽の中ではジンベイザメやマンタが気持よさそうに泳いでいた。何回も来たよね。ああ。初めてのデートもここだったよね。ああ。ほんとに覚えてる？ 覚えてるよ。俺は何も気の利いたことが言えない。

鉄

「あなたちょっと鉄道模型にお金かけすぎよ。電車に乗るのは大して好きじゃないくせに。意味分かんない」「あのな。鉄ヲタにも『乗り鉄』とか『撮り鉄』とか色々あるの。俺はただ『模型鉄』なだけさ」「ほんと死ななきゃ治らないわね」「残念。死んだら『地下鉄』になるんだよ」

視力検査

視力検査は別室で行われるようだ。中に入ると眼鏡のお姉さんが笑顔で迎えてくれる。「ずいぶんおつかれのようですね」「ええまあ」「分かりました。では始めます」指示棒で指される部分を読み取ってゆく。「上、上、下、下、左、右、左、右、B、A」おや？ なんだか不思議な力がみなぎってきた。

夏の終わり

「おじさん、これ」僕は冊子を差し出す。「まだ間に合う?」「残念。今年の方はもう終わったよ」おじさんは申し訳なさそうに言う。「貴重なチケットを1枚無駄にしたね。これはちぎっておいてあげよう」「また来年があるよね」「もちろん。君の夏のチケットはあと32枚も残ってる」

また最終選考で落とされたみたいだ、俺がそう言うと妻は、そう。とだけ返した。今では頑張れと口にする事もない。俺がその言葉を嫌うと知っているのだ。台所から千切りの音が聞こえてくる。トントントン、トントントン、トントントントントントントン。俺はふたたびキーボードに向かう。

熱中症

誰か、水をくれ。俺は灼熱の太陽の下、ふらふらと歩いている。公園を見つけた。中には水飲み場があった。俺はむしゃぶりつくようにして水を飲んだ。そこで意識は途切れた。あなた部屋で倒れてたのよ。猛暑なんだからエアコンを使わなきゃダメよ。あとウォシュレットが壊れてたけど、なにかしたの？

パパの太陽

「あやちゃんもそろそろシャンプーハット卒業しなきゃね」「やだ」「ほらシャワーで流すよ」「ねーパパ」「何?」「パパにとってママってどんなひと?」「明るくて太陽のような人かな」「ふーん」「あやもパパの太陽だよ」「ちがうもんあやは土星」(それでシャンプーハットを.....)

自殺専用車両

電車を待つ私の足元には【自殺専用車両乗車位置】と記されている。鉄道会社も重い腰を上げ、飛び込み自殺対策を講じることにしたようだ。それにしても一体どのような車両なのだろう。アナウンスが流れ、列車がホームに入ってくる。いそいそと私は乗り込んだ。なるほど……吊り革の輪が大ぶりだった。

雷

ぴしゃり。と空に亀裂が走り、どおんと音が落ちてくる。引き戸のガラスがびりびり震える。どうだ。雷は面白いだろう。父が言う。ぴしゃり。僕は慌てて耳を塞ぐ。どおん。びりびりびり。音も楽しまなきゃ駄目じゃないか。父は笑顔を見せる。あなたたちいい加減にきなさい。後ろで母の雷が落ちた。

土下座

「どあほ。ちゃう。こないされたらわれどないするんじゃ」乾は土下座で額をアスファルトに擦りつけている梶原の後頭部を踵で踏みつける。「ぐぶえ」「どないや。鼻がごりっとゆうて折れたやろうが。ええか。土下座するときにはな。両手の親指と人差指で三角形作ってその隙間で鼻を守るんじゃ」

海竜の子

そのプレシオサウルスを海に返してきなさい。父さんは言う。怪我してるんだからこのまま海に返したら死んじゃうよ。僕は必死に抵抗する。駄目だ。父さんが車を出そう。さあその子を貸しなさい。嫌だ。僕は海竜の子を抱いて外へ飛び出した。とりあえず海に行くしかない。走る内、涙が溢れてくる。

行かなきゃ

エアコンの温度を下限いっぱいの16度に設定して、あたしは毛布にくるまり膝を抱えている。これならすぐに腐ることはないだろう。業務用の冷蔵庫も注文した。ばらせば入るはずだ。ホームセンターにも行かなきゃ。うちのなまくら包丁では刃が立ちそうにない。なんだかすごく眠い。でも、行かなきゃ。

塩豚

塩豚の作り方というのをネットで見つけたので試してみることにした。これなら保存が効くだろう。風呂場で作業することにする。まず切断した手足をフォークでめった刺しにしてゆく。ぶよんと跳ね返ってくる感触が面白くてほくそ笑んでしまう。あとはひたすら塩を元夫に摺り込んでゆく摺り込んでゆく。

「YO—おれのかあちゃん超すげ—母子家庭でおれを育ててくれた。YO—おれのかあちゃん超すげ—美味しいカレーを作ってくれた。YO—」「洋、いい加減にして」「YO—」「洋！ お母さん恥ずかしいのよ。お願いだからラップはやめて普通に働いて」「YO—」「洋！」

オレの金

「液晶テレビだってプレステ3だって全部オレが買ってやったものなんですよ。こいつだってオレの金で買ったモノは持って行っていいって言ったんです。だから取り返してきたまでですよ。刑事さん、オレなんか間違ったこと言ってますかね？」「それで彼女の顔まで削り取ってきたのか」

ゾンビ街

街にゾンビが発生した時は大騒ぎになったが街の者全員がゾンビウイルスに感染してしまうと呆気無く事態は落ち着いた。街全体が高い塀で囲まれゾンビ特区として統治される事になったのだ。僕たち子供のゾンビも今では普通に学校に通っている。給食だってちゃんと出る。塀の外から運ばれてくる死体だ。

僕の夏休み

閉め切ったカーテンの隙間から陽が差してくる。子供たちの賑やかな声が聞こえる。集団登校、そうか、彼らの夏休みは終わったのだ。暗算してみる。今日は8月1858日。中三の夏以来学校に行けずバイトをするでもなくただ部屋に引き籠りネットゲをし続けている僕の夏休みには、まだ終わりが見えない。

お見合い

爽やかな彼と並んで歩きながら私は見合いも悪くないなと思い始めていた。「学生時代は野球をやっていましたが球技なら一通りなんでも」「すごい」「なんならひとつ打っていきますか。僕が教えますよ」「そんな私ムリです、バッティングセンターだなんてー」彼の指差す方を見る。パチンコ屋だった。

記憶

幼き頃の記憶を思い出した。父の車で山奥へと進んでゆく。人気のない空き地で車を止めた父は外で炭に火を点け始める。母の手はずっと俺の頭を撫でている。炭の匂いに俺は「ママ、BBQ?」と訊ねる。母は泣き出しそうな顔をする。「あなた」車を降りた母は父に何かの話をしている。

就活

「次の学生です。テニスサークルではリーダーを務め、関東大会でベスト8の活躍、長期休暇中には語学留学の為に渡米、授業のない日には大学近くの商店街で積極的に清掃ボランティアなどを行うー と、このような感じですが、いかがでしょう？」 「平凡だな」 「平凡ですね」 「採れ」

夢見る少女

食パンをくわえたまま家を飛び出した。朝もやのかかった町をなるべく多くの角を曲がるようにしてジグザグに駆け抜けてゆく。遠回りになってもいい。汗だくになってもいい。いつかどこかの角を曲がったところでわたしはわたしだけの王子様とぶつかって、そして一瞬で恋に落ちるのだ。

俺はキースのように煙草を啜えルーズな姿勢でテレキャスターをかき鳴らす。痛えっ！ 手をぶつけて目が覚めた。夢を見ながらエアギターを弾いていたようだ。掛け布団も枕も目覚まし時計も散乱していてひどい有様だった。ごめんよハニー。俺は背中を向けて寝ているエアウィフを抱きしめた。

母蜘蛛

「カバキコマチグモという蜘蛛がいてな。母蜘蛛は孵化した子蜘蛛達に自分の体を喰わせて育てるんだ。母親ってのはそういうもんだ。この子はまだ2歳か？ 自分がされたことの記憶は残らない可能性が高いが母親であるあなたの所業は赦されるものではないよな」母親は床に崩れ落ちた。

いけめん

嫁がずっとウォータースライダーの方を見ている。「さっきから何見てるんだ」「若い男の子達が遊んでるの。いいわねえ」何がいいわねえだ。「ほらきた！」ひよろつとした男が次々と流れ落ちてくる。「イケメンねえ」何がイケメンだ。流し素麺がいいとこだよ。とは言わないでおいた。

「じっと鏡を見てどうしたんだい？」「私も年を取ったなと思ってね。ほら目尻の皺もそうだし、おなかだってお肉がこんなに」「その年齢なりの美しさってものもあるからね。今の君も十分きれいだよ」「でも……。知り合いが格安で脂肪吸引してくれるって言うのよ」「行ってきなさい」

母

たまに帰省すると年老いた母が喜ぶのはいいのだが帰り際に小遣いを握らせようとするので困る。薄給ではあるもののちゃんと食えてるからと何度言っても母は聞く耳を持たない。じゃあ煮物だけでもと言われ持ち帰ったタッパーを開けてみると芋の上にラップで包まれた壹万円札が載っていた。

バールのようなもの

「あなたが落としたのはこの金のバールのようなものですか？」「違うな」「ではこの銀のバールのようなものですか？」「違う」「ではこの鉄のバールのようなものですか？」「それだ」「正直者のあなたにはバールのようなものを三つとも差し上げます」「鉄だけでいいよ。金庫破るんだから」

無理ゲー

あたしのことどれくらい好き？ と訊かれた俺は幾千もの比喻を繰り出すもののダメ出しを食らい続ける。無理ゲーのコントローラーを放り投げた俺は目の前の分らず屋を強く抱き締め唇を唇で塞ぎながら文学者の絶望に想いを馳せる。やがて俺の気持ちに通じたのか彼女の膝から力が抜け始めた。

赤い月

むしゃくしゃする。誰かに憤りをぶつけたかった。誰でも良かった。だが周りには誰もいなかった。俺は夜空に向かって味の消えたガムを吐き捨てた。これが不思議とよく飛んだ。俺は怒っていたことも忘れガムが描く放物線を眺める。ガムはぺとりと月に貼り付いた。月は顔を真赤にした。

蠅が飛び回っている。流しの隅で腐り果てた残飯にでもたかっていやがるのだろう。最早片付ける気にもならない。もっぱら俺の食事は酒だった。酒が切れれば外へ買いに出る。だが今はもう酒も要らない。不思議と空腹を感じないのだ。俺の躰に蠅がたかりだした。まったく失礼な奴らだ。

フィットネスクラブ

会社の近くにフィットネスクラブが出来たので見学に行ってみた。ピカピカと輝く最新鋭の設備を綺麗なお姉さんが案内してくれる。「これは電気代だけでも凄そうだ。私に会費が払えるかなあ」私は冗談めかして言った。「いえ必要な電力は全てお客様に生産して頂いておりますので」

UFO

ある町に巨大な円盤が現れた。その大きさ恐らく東京ドーム20個分はあっただろう。だが円盤は町を攻撃するでもなくただぷかりと空に浮かんだままだった。日当たりが悪くなった。人々はそう言って次々と町から出ていった。遂に最後の住人が町を去ったその日。円盤は静かに着陸した。

従姉妹

フロントガラスの向こうに笑顔。おまたせ！ 口の動きでわかる。従姉妹の菜々は息急き切って助手席に乗り込んでくる。「お兄ちゃん、海行こ海」「海？ クラゲばっかだぞ」「いいの。泳ぐわけじゃないし。それともあたしの水着姿見たかった？」「子供の頃散々見たよ。裸もな」「ヘンタイ」

菜々は馴れた手つきで自分のiPodをステレオに繋げる。「お兄ちゃんまだCDなんかで聴いてるんだ？」菜々はセンターコンソールに置いていたサザンのCDケースを指先でつまみ上げる。「CDの何が悪い」「悪くはないけどさ」エンジンをかけると、西野なんとかの曲が流れ始めた。

「だって手が汚れるの嫌じゃん」彼は涼しげな顔でそう言う。彼は何でも箸を使って食べるのだ。ポテトチップもハンバーガーもお団子も。確かに変わった人ではある。だが私はそんな彼を深く愛していた。ただ、いつも電気を消して貰うので何も見えないのだが、彼の愛撫は、少し、痛い。

息子

いつものように部屋に引きこもってエロゲをやっているといきなり机の引き出しから若い男が飛び出してきた。「うわっ!」「やあパパ」「は? 君だれ?」「パパの息子だよ。未来からやってきたんだ」「ええっ!?!」「驚くのも無理ないけどー」「俺結婚出来たんだ!?!」「そこかよ」

ミーコとルンバ

猫のミーコと自動掃除機のルンバは大の仲良しである。熱心に職務をこなすルンバをミーコはいつも追いかけて回す。ある日ルンバの調子が悪くなったのでメーカー修理に出したところ、なんと新品交換となって返ってきた。「ルンバが綺麗になってよかったね」ミーコは見向きもしなかった。

鉄塔さん

「パパー、あや、たこあげしたい」「あやちゃん空を見てごらん。鉄塔さんと鉄塔さんがあやとりしてるでしょ。あやもあやとり好きだよ。凧揚げすると邪魔になるからやめようね」「うん……かわいそうだし」「何が可哀想なの?」「だっててっとうさん『川』しかつけれないんですよ」

生後八ヶ月になる娘が突然ハイハイを覚えた。イラストレーターである私は外で編集者との打ち合わせがあった為、失業中の夫に部屋の物を片付けるように頼んだ。「小さい物とか飲み込むと危ないから。あとヒモなんかもよろしくね」帰宅すると夫がいない。小物と一緒に段ボールに入っていた。

やっとな。これでやっとな死ねる。この小説は傑作や。間違いなく評判になるし間違いなく売れる。歴代の芥川賞受賞作と比べても比べもんにならんほど売れるはずや。俺はもうこれ以上の小説は書けん。せやから死ぬ。死んだらゴミを残すこともない。この小説だけがずっと生き続けるんや。

あんたはなにを言うてるの。うちとこの子はどうなるの。あんたの小説の印税なんかたかがしれてるやろ。ちょっと賞をとったぐらいでなんやの。芸術家を気取るんやったら苦しんで苦しんで産みだしたゴミに埋もれてあんたの人生こそが傑作やったと言われるぐらい生きてみたらどうやの。

盆踊り

何やら太鼓の音が聞こえてくるので下に降りてみたところ目の前の公園で盆踊り大会が行われていた。提灯の明かりに囲まれた紅白幕のやぐらの周りを老若男女がすいすいと踊り回っている。私も輪の中に入ってみた。すぐに汗が流れてくる。気持よかった。やはりこの世はいいなと思った。

流星群

「雲ばっかだね」「だね」「これじゃ流星群見れないね」「見れないね」「晴れると思う？」「晴れないと思う」「眠い？」「眠い」「クルマに戻る？」「戻る」そんな会話のあと眠気混じりで彼女と交わった時に俺の放った流星群のうちの一発がHitしてお前が生まれたんだ。分かるか？

シロ

新型の狂犬病が蔓延していた。うちのシロまで――保健所の駐車場で檻を取り落とした。シロが襲い掛かってくる。僕は両手を交差し顔を守った。体の側面に風。背後で唸り声上がる。振り返るとシロは野良犬の喉笛を喰い破っていた。顔を上げたシロは、僕の目をじっと見つめていた。

皇居ランナー

「今日はまた皇居ランナーが多いねえ」「この人たちひたすらぐるぐる回ってるでしょ。飽きないのかな」「まあ他に走りやすい場所がないからしょうがないよ」翌朝。皇居周りの歩道は妙にべとついていた。なぜだろう？　しゃがみ込んで匂いを嗅いでみると、バターのいい香りがした。

わかめ酒

ある日、うちの酒屋に女が駆け込んできた。切羽詰った様子でわかめ酒はあるかと訊く。「夫が一度飲んでみたいと言うんです」「わかめ酒は簡単じゃないぜ。覚悟はあるのかい？」女は頷く。俺は女のスカートを捲り上げ、そっと下着を下ろした。「奥さん。諦めな。あんたパイパンじゃないか」

煙草

柏木は煙草に火を点けた。柏木は深く煙を吸い込んだ。柏木は煙を天井に向けて吐き出した。「先生、いい加減に煙草を小説の小道具に使うのはやめていただけませんか？ 古臭いんですよ」担当編集者の柏木は冷ややかな目でそう言うと、煙草の吸い殻を灰皿に押し付けた。

父の仕事

「言わねばなりません。男の子の父親としてできる最後の仕事は遺産を残す事でも孫の面倒を見る事でもなく、子を家から追い出す事なのです」「分かりました」私はすくりと立ち上がりドアを開けた。年老いた父は廊下に立ち尽していた。「父さん、早く僕をこの家から追い出してくれ」

二人の花火

「お前どこまで行っってん。どんだけトイレ長いねん」「だって人すごくて場所分からへん
くなったんやもん。トイレめっちゃ混んでたし.....」「花火終わってしもたやろ」「ごめん」「
帰るぞ」「怒ってるん?」「怒ってへん」「怒ってる」「コンビニ寄るぞ」「何買うん?」「花
火や」

未来のゴミ焼却施設に見学に行ってみた。「あれ？ ペットボトルや電化製品も混じってますよ」「ええ、実はゴミの分別は無駄が多いという事で廃止になりましたね。今は全てのゴミを一度に燃やし後から希少金属等を取り出しているんです。おっと、危ないですよ」霊柩車が入ってきた。

立ち呑み屋

せっかくの大阪出張なので立ち呑み屋に入ってみた。「いらっっしゃい！」威勢がいい。とりあえず生を頼んで壁の品書きを見ていると「お兄ちゃん、混んできたからダークダックスで！」「は？」隣のおじさんが教えてくれる。「肩と肩がぶつからんようにな、こうやって斜めに立つんや」

花卉

花火大会の翌朝犬を連れ河川敷を散歩していると、袋を手に何かを拾い集めている人がいる。「ゴミ拾いですか」彼は薄茶色の紙片を私に見せる。「花火カスです」咲く花があれば当然散り落ちる花卉もあるのだ。私は袋を貰い、夏の欠片を拾い始めた。犬は不思議そうな目で私を見ていた。

三者面談

三者面談だなんて。かったるくてしょうがない。ぼやきながら教室に向かう。廊下には誰もいない。母親はもう中だろうか。教室の扉を開けると見知らぬ男の人が独りで席に着いていた。「間違えました」僕は慌てて退室しようとする。「待って君、いいんだよ」え？ 「今日は第三者面談だ」

「ええと、先日158歳になられた徳田重吉さんはいらっしゃいますか？」「祖父は庭におりますが」「呼んでいただけますか？」「今はちょっと手が離せませんので。失礼します」ぴしゃりと扉が閉められる。「また会えませんでしたね」「ああ。たぶん庭に埋まってるんだと思うよ」

突然電話で彼女に別れを告げられた僕はただの抜け殻と成り果ててソファに沈み込んでいた。ねこのミーコが体をすり寄せてくる。ごめんね。今はかまってあげられないよ。ミーコは開け放した窓の方へ歩いてゆく。帰ってくると彼女は僕の足元にぽとりとなにかを落とした。蝉の抜け殻だった。

「なぜこんな酷い殺し方をしたんだ」「一緒に寝ていた時に他の女の名前を呼んだんです。それでカッとなって」「女の名は?」「れい子です。うわ言のようにれいこーれいこーと何度も」「待て。彼はひょっとしてアイスコーヒーが好きだったのでは」「ええ大好きです、いえ大好きでした」

記念日

「うち記念日欲しい」「記念日?」「うちらいつから付き合いはじめたかはっきりしいひんやろ」「で」「付き合いはじめた記念日が欲しいの、一周年とかやりたいの」「ええー」「やるの!」「女はほんま記念日好きやなあ。分かったよ記念日あげるよ」「え?」「求婚記念日。結婚しよ」

花火

「なんで浴衣着てるねん」「花火いく」「あかん、熱あるんやろ」「来年亮くとまた一緒に見られるかどうかわからへんもん」「なんでやねん」「さいきんつめたいやろ。そろそろ別れよとか思てるんやろ」「あほ、思てないよ」「うちわかるねん。だから、最後までいいから、花火いこ」

子亀と兄弟

湖の岸で兄弟が何かを弄っている。上から覗いてみると小さな子亀だった。平たい岩の上を這わせて遊んでいる。母親が近づいてきた。「逃がしてあげなさい」文句を言いながらも兄が子亀を湖に放した。途端、水の底から浮かび上がる影。大きな鯉が子亀を丸呑みし、身を翻して消えた。

世代間格差

「若者世代と年長世代との間で格差が広がっているのですから、消費税増税ではこのギャップは埋まりませんよ」「すると資産課税の強化か」「いけません。時代は官から民へ。ベンチャー企業を支援しましょう」「業種は?」「年長者から若者への所得移転事業。つまり振り込め詐欺です」

髪の毛

眠い目を擦りながらトイレに行くと便器の中に髪の毛が落ちていた。水面に浮かんだ二本の髪は絡み合うように二重螺旋を描き仲睦まじく泳いでいる。気味悪いのですぐに流した。だが何度流しても翌朝にはまた髪が浮かんでいる。タンクの蓋を開けてみると屍蠟化した女の頭が沈んでいた。

授業参観

「あなた、こんどあやの授業参観があるの」「分かった。俺が行くよ」「あなた最近妙に授業参観とか学校の行事に積極的じゃない」「やっぱりうちは共働きだしな。育児関係の負担は分担しないと」「ふうん。これあやが書いた短冊よ、見て」【パパがはやくせんせいとわかれますように】

羽音

ああもう、蚊の羽音がうるさくて寝れやしない。「おい、蚊取り器あったよな」「ん……、切らしてるわ」「じゃあ蚊取り線香でも蚊帳でも何でもいいよ、何かあるだろう。蚊がうるさくて寝れないんだよ」妻はごそごとと枕元を探り、何かを手渡してくる。「はい、どうぞ」耳栓だった。

すれ違い

「山口さんサッカー観ました？」「録画してあるんだ言わないでくれ」「よお山口、昨日のサッカー観たか？」「録画してあるんだ言わないでくれ」「ねえ、あなたに言いたいことがあるの、サーー」「録画してあるんだ言わないでくれ」「サヨナラ、あたし、実家に帰らせていただきます」

「あなたも知っての通り、我が家の財政は破綻寸前です。そこでね、事業仕分けをしようと思うの。まずあなたのお小遣いは半分。あと無意味な育毛も止めてもらいますからね」「むう黙って聞いてれば……。じゃあお前のその美容整形はどうなんだよ！」「あら必要な公共事業もあるのよ」

夕焼け部

「ねえ、あなた。あの子、高校で夕焼け部を作ったらしいわよ。川の土手とか学校の屋上から、ひたすら夕焼けを鑑賞するんですって」「そうか。さすが君の娘だね。学生の頃、日が暮れるまでずっと飽きもせずに夕日を眺めていた君の後ろ姿を思い出すよ」「なに言ってるの。元部長さん」

ピザ

すみれは客の部屋から出てケータイを開く。「店長、チェンジです。すみません」『そうか。お客さんなんて?』「ピザは頼んでねーんだよ。ですって。デリヘル呼んでおいてピザがどうか意味わかんないですよ。危ない人かも」『.....そうだな。すぐ代わり用意させるから帰ってこい』

魚のいない水槽

通りから青白く光る水槽が見えた。喫茶店の店内は薄暗い。カウンター席に座るとグラスに入った水が置かれる。唇を湿らせ、水槽を振り返る。魚は一匹もない。水草がただ揺れている。なんだか眠い。気がつくと俺は水に浮かんでいる。ガラスの向こう。マスターが俺を覗き込んでいる。

母の日

部屋の前に夕食を載せたトレイを置いておく。わたしが階段を降り終えた頃、階上でドアの開く音がする。食欲はあるんだから大丈夫、あの子はまだ若いんだから―― 食後二階に上がる。息子の部屋の前には食べ終えたトレイと一枚の紙。色鮮やかなカーネーションがプリントされていた。

ふつつかでふしだらなむすめ

「うちのふつつかなむすめがお宅のふしだらなむすめさんをたぶらかして誠に申し訳ありません」「なにをおっしゃる。うちのふつつかなむすめのほうこそお宅のふしだらなむすめさんをたぶらかして誠に申し訳ありません」親父間飛び散る火花。だが当のむすめ達は傍観を決め込んでいる。

仕込み鍋

「お前の武器はその仕込杖か？」「違う。これはただの杖だ。武器はこれだ」「なんだ雪平鍋じゃないか」「違う。仕込み雪平鍋だ」「煮物でも仕込んでいるのか」「柄の部分に短刀を仕込んでいる」「包丁じゃないか」「ちゃんと切れる。ほら、人参に大根――」「やっぱり煮物じゃないか！」

ざぼん。鈴木双葉は浴槽にダイブする。くるりとでんぐり返しする。手足はひらたいひれとなり、尻の先から尾びれがすくすくと伸びてゆく。よし。浴槽の底を体当たりで破るとそこは海。海水の冷たさが心地よい。双葉は決意する。フタバスズキリュウとして生きる。もう家には帰らない。

キャンドルライト

キャンドルライトが二人の間で揺れている。冷たい手で僕の手に触れながら彼女は言う。「もう、ダメかもしれないわね」「なんでそんなこと言うんだよ」「何事にも終りはあるものよ」「嘘だ。絶対嘘だ」僕は席を立つ。彼女の前に三枚の千円札を放り投げる。信じるものか、占いなんて。

透明人間

透明人間になれたら楽しいだろうなあ。なんて夢想したこともあった。だけどじっさいに透明人間になってみると楽しいどころかつらいことだらけだった。家でも教室でも僕は存在しない存在。朝陽が射してくる。僕はガス栓をひねる。陽の光に手のひらをかざす。ほら、透き通ってゆく。

夜間飛行

キッチンの隅っこで煮詰まった鍋の中身を眺めながら煙草を吸う。煙とともに口から吐き出されたわたしの意識のかたまりは換気扇のブレードによってすばすばと寸断されながら静まり返った夜の町へと繰り出してゆく。家庭から解放された「わたし」たちは、つかの間の夜間飛行を楽しむ。

変身

目が覚めてみるとベッドの隣で夫が芋虫になっていた。手足を失いもぞもぞと蠢く姿は滑稽でもあり薄気味悪くもあった。「ちょっと」こぶしで突く。「起きなさいよ」足先で軽く蹴る。「うううう」「家の中で寝袋で寝るのやめてくれる？」「お前がふとんを取るからじゃないか」

肉弾

屋根がごんごんと鳴っている。また肉弾が降り注いでいるようだ。出かけるつもりだったが今日はもうやめだ。たかが人肉と言えども頭に直撃すると命はない。ヘルメットを被ったところで首がやられるので意味がない。憂鬱だ。明日は血と脂と肉片にまみれた屋根の掃除をせねばならない。

止まない雨

今宵。7,867日間降り続いた雨が止んだ。明日は朝から晴れの予報が出ている。生まれてこの方、写真や動画でしか見た事のなかったお日様を、まさかこの目で拝める日が来ようとは。決めた。山へ登り、日の出を待とう。俺は五階にある部屋の窓を開け、ゴムボートで漕ぎ出した。

嫌煙家

ベランダで食後の一服をする。嫌煙家の嫁を持つと大変だ。近頃は公共の場所でも禁煙化が進んでいる。俺のような愛煙家はどこへ行っても肩身が狭い。ふう。溜息混じりの煙を吐き出す。母ちゃん。ベランダでごめんな。あいつ。煙ダメなんだ。俺は線香に火を点け、仏壇に手を合わせた。

タモリ

五歳になったばかりの我が娘は一丁前に新聞を広げている。ふ。思わず頬がゆるむ。まだ漢字も読めなくせに。「パパ、しんぶんはタモリでてるよー」娘は夕刊の一面を指差している。「ほう。どれどれ、見せてごらん」「ほら、ここ！」わたしの目に太文字が飛び込んでくる。『夕刊』

異物

ただいまー。と言っても一人暮らしなので返事はない。北向きのあたしの部屋は電気を点けても。暗く。寒い。台所で米を洗い、炊飯器をセットする。さて。トイレトイレ。開けて違和感。便座が上がっている。なんで？ ずずず。和室から。ずずず。畳が擦れる音。ずずず。近づいてくる。

サイン

ウインカーと間違えてワイパーを作動させてしまう。「ウインカー点滅は曲がりますのサインだしハザードランプ点滅は注意してのサインだしブレーキランプ5回点滅はアイシテルのサインでしょ。ねえ今のワイパーは何のサイン？ 晴れてるよ？」「うるさい。お前とはもうバイバイだ」

不機嫌な朝

霧雨煙る朝。一人、駅へと向かう。商店街の店がシャッターを上げる音。行き交う人々の頭はどれもみな俯きがちで、だらしなく開いた口元から空白の吹き出しをポップアップしては大気中に不機嫌を溶かしてゆく。地面に近いところから不機嫌が充満してゆく。僕は足を取られそうになる。

気がつく目で追っている。だからと言って彼とどうこうなりたいわけではない。職場で芽生えた淡い恋心を育てようと思うほど初でもない。ただ横顔を見てるだけ。それでいい。いわば勤務時間内限定サプリメント。でも。今日配るつもりで持ってきた安売りチョコの中にはひとつだけ――

若者の〇〇離れ

日本の若手選手に転倒者が続出していた。モーグル、フィギュアにボブスレー、果てはカーリングまで。皆が皆、太ももを押さえては雪上氷上にうずくまる。何故だ？ 日本人の友人に訊いてみた。昨今。日本では若者の肉離れが深刻なのだと言う。そうか。野菜ばかり食べているからか。

銃弾

雨は銃弾。暗闇の中、地面を穿つ。飛び散るアスファルト。マズルフラッシュ。タタタン。銃声。弾幕を浴びた乞食の男は今宵壊れた操り人形のように無様なタンゴを踊る。兵士たちの下卑た笑い。投げ付けられるビール瓶。歓声。軍用車は走り去る。壊れてしまった人形を雨が撃ち続ける。

嘘つき

帰り道。彼の持つ傘はずっとわたしの方へ傾いでいた。濡れちゃうよ。と何度言っても彼は、大丈夫大丈夫。と軽い調子で優しい嘘をつく。駅前で彼は顔を寄せてくる。「人に見られちゃうよ?」「大丈夫大丈夫。傘で隠してるから」ん。わたしは目を瞑る。嘘つき。それ、透明の傘じゃん。

救い

ちっ。捻り潰した空き缶を投げる。薄汚い黒猫が逃げる。女房は男を連れ込んでやがるし娘はホストに入れ込んでやがる。クソったれな俺の人生にはクソったれなこの街がお似合いだ。頬にひやり。空を見上げる。雪。見渡せば、看板持ちもポン引きもオカマ野郎も、みな空を見上げている。

わたしの息子

じゃ面接に行ってくるね。はい。頑張ってきてね。わたしは笑顔で息子を送り出す。引きこもり生活から抜け出そうと奮闘する姿を見ていると思わず目頭が熱くなる。さあ、電話しなきゃ。今から伺いますのでよろしくお願いします。ええ。不採用で。わたしはぜったいに息子を手放さない。

Googleタイムトラベル

Googleタイムトラベルβ版がついに始まった。Enter。あたしは画面に吸い込まれる。まばゆい光。衝撃。――1993。夏。確かにあたしはこの海岸にいた。いた。あたしだ。「ちょっとあんた」「お姉さん誰?」「今すぐここから立ち去るの」「はあ?」「シミになるのよ!」

ぱぱのしごと

「あなた。彩がね、幼稚園から帰るなり変な事言うの」「なんだい？」「あの子お花が大好きでしょ」「お花屋さんになりたいってか」「それが違うの。お刺身にタンポポをのせる人になりたいって言うのよ」「一体どこで覚えてきたんだそんな言い回し」「あの子ひょっとしてあなたの仕事の事」

ポイ捨て

ポイ捨てはやめましょうー。小学生の一団が声を上げながら歩いてくる。ポイ捨てされた吸殻を拾い集めているようだ。と、集団の中に友人の女を見つけた。俺は声を掛ける。「日曜の朝から精が出るな」「……」「子供達と一緒に吸殻を拾ってるんだろ?」「違うの。あたしも拾われたの」

寝不足だ。ハンドルを握る手にも力が入らない。ガラス越しの景色は淡々と過ぎてゆく。大音量の音楽を聴いていても瞼が落ちてくる。と、一瞬、意識が途切れた。いかん。慌てて目を開ける。あ、当たる！ 身体が強張る。全てがスローになり、ガラス越しの画面には7が三つ揃っていた。

エレベーター

がこん。という情けない音と共に突然エレベーターは止まった。僕は顔を上げる。階数表示のランプは消えている。閉じ込められたのは僕とOL風の若い女性。二人きり。極限状態に置かれた男女の間に恋が生まれる確率約92%。作業服姿の僕は今回も計画通り、粛々と彼女をモノにする。

ハリガネムシ

「ハリガネムシって知ってるか？　そうそう、カマキリの腹の中に住んでる黒くて細長い奴。あれをな、おれ食ってみたんだ。もずくみたく酢の物にしてさ。味？　まあ大人の味だな。ちと苦味はあるんだけど歯応えが良くてさ。旨かったよ。うん」そう語る島田のヒゲはもぞもぞと蠢いていた。

蒟蒻ゼリー

いびつなハート形をした蒟蒻ゼリーを舌の上で転がしながらあたしは寢室へ行き、寝ている彼氏の開きっぱなしの口に唇を合わせる。舌で蒟蒻ゼリーをにゅっと押し込む。彼は一瞬ううんと唸った後、激しく咳き込んで目を覚ました。うふふ。あたしは戸惑う彼氏に今度は普通のキスをする。

お豆腐

夫に、お前なんか豆腐の角で頭ぶつけて死んでしまえと言われて腹が立ったので殺そうと思いました。ええ、凍らせたお豆腐で。最初は面で、そのあと角を使いました。そのお豆腐ですか？
崩れちゃったので麻婆豆腐にさせていただきました。だって、刑事さん……、もったいないでしょう？

つぶつぶコーン

つぶつぶコーン入りのコーンスープをくいと飲み干したら案の定缶の底につぶつぶコーンが残っちゃっていらいらする。大口広げて缶の底をとんとんと指先で叩いてみると、ころりころりと粒が落ちてきた。噛む。ガリッと音がする。とっさに吐き出した。歯だった。自分の歯じゃなかった。

刀

おちよは長兵衛の背中に声をかけた。あなた、ゆうべはまた他の女の人の処へ行っていたのですか。少しはわたしの気持ちも考えて下さい。わたしが他の男の人とそのようなことになってもよいのですか。長兵衛は刀の手入れをしながら言う。ちよ、よいか、刀は拭けても、鞆は拭けぬのだ。

下ろし金を手にして里香は途方に暮れる。こんな時に琢也がいればなあと思う。でももう、お別れしたんだから―― 里香は自分にそう言い聞かせる。そうだ。足や頭は後回しにしてお腹とかお尻の柔らかい肉から摺り下ろせばいいんだ。浴室の床はすでに琢也の血と脂でぐじゅぐじゅになっていた。

親の顔

ちっ。リーチもかかりやしない。私は煙草に火を点け、大きく煙を吐き出した。隣の客が煙たそうに手で扇ぐ。なんだ。感じの悪い奴だな。ちらりと横目で見ると。裾の破れたジーンズ。だらしない格好の若者だった。まったく。親の顔が見たいよ。視線を上げるとそこには息子の横顔があった。

少女

小箱の中で踊る少女をずっと見ていた。はじめ凍りついていた表情は雪解け水のように緩み今では柔らかな笑みが新芽のように吹きこぼれている。空にはさらさらと星屑が流れ天の川を泳ぐ魚たちが時々跳び上がっては星の欠片を飲み込んでいる。踊り終えた少女のからだは透き通ってゆく。

満月

幼なじみの美月と夜のプールに忍び込んだ。水面は鏡のように月を映している。ぱしゃりと水を手で打つとゆらりと月は身をかかず。掴めそうでいて掴めない。「見てて」美月は空でくの字を描きひゅんとプールに飛び込んだ。浮かび上がった美月は胸の前で輪を作る。波紋が消えると美月は月を抱いていた。

兄

そろそろ帰ろ。兄の号令で駆け出した皆が鳥居の前で立ち止まる。鳥居の上に石を載せると願い事が叶うと言うのだ。「載せられるまで帰ったらあかん」先に成功した兄達は私を置き去りにして行ってしまう。数十分後、涙で顔をぐしゃぐしゃにした私が道路へ出ると電信柱にもたれてひとり兄が立っていた。

アンドロイドは電気羊の数を数えるか

ヒトと同じようにアンドロイドにも睡眠は必要である。眠れぬアンドロイドTJはベッドのなかで電気羊の数をひたすら数えていた。暗闇で七色の光沢を放つウールを自動生成する電気羊の世話がTJの仕事である。電気羊飼いの朝は早い。だが焦れば焦るほど眠りのしっぽは遠のいてゆく。

方舟

深夜の動物園。破られた鉄柵を動物たちが列をなしてくぐり抜けてゆく。飼育係の林は行列の先頭を歩いている。園を囲う森の木々が何事かとざわめく。空襲は日に日に激しさを増していた。今夜逃げ出さなければ彼らは殺されるのだ。闇に紛れ川岸まで辿り着いた。さぁお前たち、舟に乗るんだ。

お留守番

ノックの音がした。「どちらさまですか」「修理屋です。開けて下さい」「ママにあげちゃダメっていわれてるの」「おじさんはママに頼まれてきたんだよ」「うそつき」足元のドアを開けた。猫のルークが飛び出してゆく。外から悲鳴が聞こえてくる。おばかさん。ママはもういないのに。

透き通るような白い肌に解剖用のメスがさくりと入る。この瞬間が見ていて一番楽しい。男子中学生の身体から色鮮やかな臓物を取り出されてゆく。ねえ空っぽになった入れ物はどうするの？ Jは親指を下にする。ビルの1階にはお肉屋さんが入っている。ブッチャーさんの店？ そうだ。

家事手伝い用

「ゴ主人様ワタシハ家事手伝イ用アンドロイドデスノデ、ソノヨウナ行為ハ」「機能は付いてるんだろ、取説に書いてたぞ」「デスガ、感情スイッチが入ッテシマイマー—ァア」「ただいま」「ゴ主人様遅カッタデスネ」「飯は要らない捨てといてくれ」「分カリマシタ」ゴ主人様ハ誰ト、ゴ主人様ハ誰ト、

火男

口の中にガソリンを含んで火を吹くあれをやろうとしたところ全身に火が回り火男になってしまった。それ以来自らを焼き尽くしてしまわぬようこまめに燃料を補給し続けなければならない。当然部屋も追い出され今では廃校となった小学校の焼却炉の中で暮らしている。さて芋でも焼くか。

差別

お笑い芸人の彼を前にして父は言う。「あなた方のように人を差別することによって笑いを取って商売にしている人の気がしれんよ」「お父さんやめてよ」「いいんだ。香織のお父さんの言う通りだ」彼は席を立とうとする。「いいか。お笑い芸人なんかとの付き合いは絶対に認めんからな」

鯉のぼり

「やるなら今日だ」「でも、あなた」「また暗く狭い中で一年を過ごすのか」「分かりました」「起きろ鯉太郎」子鯉はむにゃむにゃと寝ぼけている。父鯉は身体をくねらせ、尾びれで母鯉と子鯉の口紐を断ち切った。三旒の鯉のぼりは星空に舞い上がり、やがて天の川へと吸い込まれていった。

野球人

凍りついた東京湾に歓声が響いていた。ゲリラの子がペンギンの子と一緒に野球に興じている。ゲリラの子が速球を投げ込む。ペンギンの子はバントで転がす。ヘッドスライディングで1塁に滑り込むペンギンの子。セーフだ。だが。「こらーヘッスラはあかんよー」思わず桑田は声をかけてしまった。

マザコン男だ。そう思った。お見合いの席だというのに私の質問にいちいち母親が先回りして答えようとするのだ。私は爆弾を落とす。「明さんてマザコンですよ」床に崩れ落ちた男は母親の足を広げてその間に頭を埋めてゆく。男の身体が消えた。やがて母親の股ぐらから男の顔だけが現れた。

死にたい方が増えてまいりましたので2035年にこの安楽死施設が作られました。環境負荷は最小限。もちろん苦痛はございません。みなさまいたって穏やかな表情であの世へ逝かれますよ。こちらがパンフレット、こちらはお土産の石鹼とお醤油です。どうぞお持ち帰りくださいませ。

葬らん

目測が狂った。腐りかけた死体に跨り腰をくねらせ淫らな声を上げていた我が娘を葬らんとして振り抜いたバットがむなしく空を切る。我が娘はゆっくりと振り返る。白目を剥いた両の眼から血の涙がはらりはらりと零れ落ちる。わたしは再びバットを構える。次の一振りで必ずや葬らんとす。

記憶

記憶が明瞭な内に君に手紙を書こうと思う。由香もまだ小さいのに僕がこんな風になってしまい本当に申し訳無い。君は「失敗した！」と思っているかもしれないね(笑) でも僕は君と過ごせた日々を心の底から幸せだったとおもってる。本とうにありがとう。りこんとどけいれておきます

3D

便利なはずのネットに時間を吸い取られた挙句いつのまにやら身体までネットに吸い取られてしまった僕たちはなんとか元の世界に戻るべく有志を集め開発した3D映像の技術で画面から飛び出そうと試みるものの現実世界の人々は色メガネで見るばかりで一向にこの技術を利用しようとはしない。

夏のテロリスト

夏のテロリストは階段の踊り場から水風船を投下する。焼け焦げたアスファルトが冷やされてゆく。突如五階と三階で扉の開く音。怒声が響く。母Aと母Bに挟撃されたテロリスト達は呆気無く投降する。テロリストA宅で行われた尋問の後、与えられたカルピスの中、氷がひとつキーンと鳴った。

蜘蛛の糸

NT&T社の新製品発表会に来ていた。「マダガスカル島で発見された新種の蜘蛛の糸を利用することによりついに人類の夢が叶ったのです！」ドラムロールに合わせてドーム天井が開いてゆく。晴れ渡る青空からきらきら輝く1本の糸が降りてくる。その先には紙コップが付いていた。

別離

「ぼく戻りたくないよ」「あなたこのまま孝を連れて三人で逃げましょう」「お前は毎年それを言うがもう迎えが表に来てるんだぞ。こんな会話を奴らに聞かれたらどうする」「でも――」「何度も言わせるな。この国は子供を親から引き離して育てることに決めたんだ。孝、また来年、七歳の誕生日に会おう」

怪獣

怪獣は破壊の限りを尽くし今まさに私の顔面を踏み潰さんとしている。「アンパンマン助けてー！」怪獣の動きがぴたりと止まる。私はその隙にリモコンを操作する。怪獣はテレビ画面に浮かび上がるヒーローの姿に釘付けになっている。主題歌が始まると我が家の怪獣はおしりをふりふり踊り始めた。